令和２年度福祉教育研修会「地域の中でひきこもりを支えるために」 新聞記事掲載

山 13版S 2021年(令和3年)3月14日(日) 朝日

「家族に抱え込ませない」

朝日 ひきこもり支援 体験談から学ぶ

ひきこもりの人との関わり方について考える研修会が13日、朝日町内であった。ひきこもりなどの支援に携わる「コミュニティハウスひとのま」（高岡市）の代表宮田隼さん（37）が「家族だけに抱え込ませないことが一番」など自らの経験から得た教訓を説き、約20人の参加者はうなずきながら耳を傾けた。

「純粋な気持ちでぶつかれるかどうか」。ひきこもりの人たちとの向き合い方について語る宮田隼さん（右）＝朝日町泊

同町の社会福祉協議会では、5年ほど前からひきこもりに関する相談が増えたことを受け、3年前に研修会を始めた。

宮田さんは10年前、誰でも立ち寄れる居場所として一軒家を開放。ひきこもりの子を持つ親からも相談を受けるようになり、支援に関わるようになった。

本人と会うのが難しい場合も「家族と関わり続けることで入り込む隙が生まれる」と語り、家族を孤立させない関わり方の重要性を強調した。また本人と対する際の意識として、「問題を解決させる」という頭は横に置き、「どうやって仲良くなるか。そこに力を注ぐことで関係が作りやすくなる」と説いた。

宮田さんは最後に、自らSOSを出せない家庭が少なくない状況の中で、「地域の中で色んな目で見守れる体制づくりが大切になる」と語った。

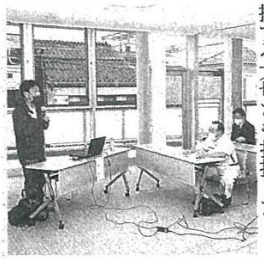
（竹田和博）

朝日新聞　令和３年３月14日朝刊

■引きこもり支援語る

朝日町社会福祉協議会は、同町の五叉路クロスファイブで、引きこもりをテーマにした研修会を開いた。コミュニティハウスひとのま（高岡市）の宮田隼代表が講演し、町民ら約20人が耳を傾けた＝写真。

ひとのまは、引きこもりや不登校の人らの居場所になっている。宮田さんは、支援と捉えず、引きこもっている本人と仲良くなることを最優先していると紹介。徐々に距離を縮め、自宅を訪れたり、ひとのまに来てもらったりしているとした。家族が抱え込まないように、定期的に情報交換する大切さも指摘した。



北日本新聞　令和３年３月16日朝刊